



『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿：第六帖(三) 山吹・撫子・秋萩

著者	福田 智子, 土山 玄, 藤井 翔太, 八巻 朝美, 木村 望, 久保 文乃, 青木 聡美, 小川 恵慎, 桐谷 早織
雑誌名	文化情報学
巻	5
号	1
ページ	87-69
発行年	2010-06-30
権利	同志社大学文化情報学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013111

研究ノート

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿——第六帖(三) 山吹・撫子・秋萩——

福田 智子・土山 玄・藤井 翔太
八巻 朝美・木村 望・久保 文乃
青木 聡美・小川 恵慎・桐谷 早織

『古今和歌六帖』は、約四千五百首の歌を、二十五項目、五百十七題に分類した類題和歌集である。収載歌には、『万葉集』『古今集』『後撰集』など、出典の明らかな歌もある一方、現在では出典未詳と言わざるを得ない歌、あるいは本歌との本文異同がきわめて大きい歌もある。本稿では、それらに該当する和歌を、第六帖の山吹・撫子・秋萩の三つの題に配されている歌から撰び出し、注釈を施す。

凡例

一、本稿は、『古今和歌六帖』所載の和歌について、出典考証をもとに、出典未詳歌、あるいは本歌との本文異同がきわめて大きい歌について注釈を加えるものである。

二、歌番号は、『新編国歌大観』の通し番号を用い、歌題を()を付して記す。

三、底本は、『新編国歌大観』と同じく、宮内庁書陵部蔵桂宮本とする。

四、本文は、歴史的仮名遣いに統一し、踊り字を解消して当該の文字に改め、底本の表記を()に入れて傍記する。また、私見によって濁

点を付す。さらに、送り仮名など、底本にない文字を補った場合には、本文の右に「・」を付す。なお、漢字仮名の区別は底本のままとする。

五、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は示さず、語の異なりのみを示す。諸本とその略称は次のとおりである。

○永青文庫蔵北岡文庫本 略称(永)

○島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本 略称(松)

○内閣文庫蔵「和学講談所」印本 略称(和)

○内閣文庫蔵「江雲涓樹」印本 略称(江)

○神宮文庫蔵「林崎文庫」印本 略称(林)

○神宮文庫蔵「宮崎文庫」印本 略称(宮)

○和歌山大学附属図書館紀州藩文庫蔵田林義信氏旧蔵本

略称(紀)

○ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本

略称(黒)

○寛文九年版本

なお、諸本本文は、主として国文学研究資料館所蔵のマイクロ・紙焼き

資料に拠ったが、次の三本については個々の資料に拠った。

(永) 細川家永青文庫叢刊3『古今和謠六帖(下)』(汲古書院、昭和五十八年一月)所収の影印

(松) 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫所蔵の原本および紙焼き資料

(寛) 架蔵本

六、他出には、『古今和歌六帖』からの引用と思われる歌について、歌集

の名称(『新編国歌大観』の目次に拠る)、巻数、部立、歌番号、歌題、

詞書、作者名、歌本文、左注を順に示す。

七、考察 考察中での和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大

観』に拠る。引用形式は、原則として、「和歌本文」(歌集名・部立・

歌番号・作者名・詞書)とする。『万葉集』の番号は、新・旧の順で

表記し、本文には適宜漢字を当てる。なお、必要に応じて、歌集名に

底本の名称を冠することもある。

注釈

三六〇五(山ぶき)

【本文】

やまぶきのはなはちとせもさくべきをくれぬる春のをしくも有るか

な

【校異】 ○さくへき―咲つき本の上へ(宮) ○有かな―有本の上(黒)・有(寛)

【語釈】 ○やまぶき 晩春から初夏にかけての花。『万葉集』以来多く詠まれる。 ○ちとせ 千年。長い年月。 ○をしくも 「をし」は、失

うのにしのびない、事物を愛するあまりに、心をひかれて手ばなしにくだい。思いきって捨て難く思う。

【通釈】

山吹の花は、千年もの間、毎年咲くはずなのに、暮れてしまったこの春が、残念でならないなあ。

【他出】 なし

【考察】

「やまぶき」と「ちとせ」との組み合わせは、『新編国歌大観』で七例見出されるが、勅撰集に用例はない。初出は、「山吹の花のさかりにかくのごと君を見まくは千年にもがも」(万葉集・巻二十・四三二八・四三〇四・同じ月二十五日に、左大臣橘卿、山田御母の宅に宴する歌一首)であろう。「右の一首、少納言大伴宿禰家持、時の花を囁みて作る。(以下略)」という左注によれば、大伴家持が橘諸兄の宴で、ちやうど盛りであった山吹の花を見て詠んだ歌であり、この状況が千年もの長い間、続いてほしいという願いを込めた歌である。当該歌の上句の内容は、この万葉歌の影響を少なからず受けているものと考えられる。他にも『古今六帖』の成立と活躍時期を同じくする恵慶法師の歌に、「千とせすむ水にかけさす山吹の花をのどかにをしむべきかな」(恵慶集・二八・人の家の、やり水のほとりに、柳さくら)といった用例がある。

第四句「くれぬる春」の用例は、「行く月日おもほえねども藤の花みれば暮れぬる春ぞしらるる」(貫之集・二五五)がごく早い例であろう。他にも、「はなみにもものうき人はいたづらにくれぬる春もしられざりけり」(道濟集・六三・或所にて、ことなく春むなしくすぎぬといふ題をよみしに)などの例があり、移りゆく季節を、花の移ろいによって知るといふ趣向である。

結句の「をしくもあるかな」は、「ゆく年のをしくもあるかなますかがみ見るかげさへにくれぬと思へば」(古今集・冬・三四二・きのつらゆき・歌たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる)が初出であり、『古今集』時代から詠まれている。他にも「つねよりのどけかりつるはるなれどけふのくるはをしくもあるかな」(書陵部藏御所本(五一〇・一二) 躬恒集・二七二・三月ふたつあるとし)、「こむとしのためにはいのる春なれどけふのくるはをしくもあるかな」(天理本貫之集・六五・春尽日おほせ事ありてつかまつる)などがあり、どちらも惜春の情を詠んでいる点で、当該歌に共通する。

三六一三(山ぶき)

【本文】

わがやどの八重山ぶきのちるをみて春過ぎ行くとみるぞかなしき

【校異】なし

【語釈】○やど 家の敷地。庭先。前庭。 ○八重山ぶき 山吹の一種で、

八重に咲く種のことを指す。

【通釈】

私の家の庭先にある八重山吹の花が散るのを見て、春が過ぎていく

のがわかるのは悲しいことだ。

【他出】なし

【考察】

「八重山ぶき」は、『万葉集』には用例がない。勅撰集における初出は、「わがやどのやへ山吹はひとへだにちりのこらなんはるのかたみに」(拾遺集・春・七二・よみ人しらず・題しらず)であり、これ以前の『古今集』後撰集』には見受けられない。一方、私家集では、『後撰集』撰者の世代の作として、「人しれずおもふ心のふかきかな八重山ぶきの色よりもけに」(元輔集・二三四・又人に)、「ひとへづつやへ山吹はひらけなんほどへて匂ふ花とたのまん」(兼盛集・九五・山ぶき)、「枝たわにやへ山吹は咲きにけり井での河べをおもひやるかな」(兼盛集・一八〇・山ぶきおひたる所)、「けふくるはるをひとへにをしてみてはやへやまぶきのいろをいかがせん」(能宣集・三六〇・三月つくるを)、「このへのやへやまぶきはしりたれどとへといへとは君ぞをしへし」(相如集・五・返し)など、少なからぬ用例が存する。

また、「八重山ぶき」が「ちる」のを詠んだ歌としては、前掲の『拾遺集』歌のほか、「吹くかぜにとまりもあへずちるときはやへ山ぶきのはなもかひなし」(興風集・七〇)、「わがやどの八重款冬はちりぬべし花のさかりを人の見にこぬ」(元真集・二・なかのはる、いけの辺にやまぶきさくらさけり、をむなすだれをあげてたり)などが挙げられる。

さらに、「やど」と「やまぶき」との組み合わせは、すでに『万葉集』に見え、「山吹をやどに植ゑては見るごとし思ひは止まず恋こそまされ」(万葉集・卷十九・四二一・四一八六)や、「我が背子がやどの山吹咲きてあらば止まず通はむいや年のほに」(万葉集・卷

二十・四三三七・四三〇三・右の一首、長谷、花を攀ち壺を提りて到来す。これに因りて、大伴宿祢家持この歌を作りて和ふを指摘することができ。さる。

第三句の「春過ぎ行く」は、平安期において、そのままの形の用例は見あたらないが、「過ぎ行く春」の用例は存する。「あかずしてすぎゆくはるにただちあらばことしばかりのあととはよかなん」（興風集・二三三）、「なげきつつ過ぎゆく春をしめどもあまつ空からふりすていぬ」（千里集・二〇・惆悵春光留不得）などの例がある。

結句「（……と）みるぞかなしき」の勅撰集における初出は、『後撰集』である。「ともすれば玉にくらべしすかみひとのたからと見るぞ悲しき」（後撰集・恋一・五五六・よみ人も・題しらず）、という例があり、その後も、「雨ならでもる人もなきわがやどをあさぢがはらと見るぞかなしき」（拾遺集・雑賀・一二〇四・承香殿女御・東三条にまかりいでて、あめのふりける日）、「わぎもこがねくたれがみをさるさはの池のたまと見るぞかなしき」（拾遺集・哀傷・一二八九・人まろ・さるさはの池にうねべの身なげたるを見て）などが存する。この『拾遺集』の人麿歌は、『万葉集』にはなく、平安中期成立とされる『人丸集』に載っている。そこで、私家集に目を向けると、『古今六帖』成立時期と思しき十世紀後半、すなわち、『後撰集』撰者の活躍時期から用例が見える。

三六一五（山ぶき）

【本文】

なにしおへばやへ山ぶきぞうかりけるへだててをれる君がつらさに

【校異】 ○をれる―たれか（和）

【語釈】 ○なにしおへば 「し」は副助詞。「おへば」は、動詞「おふ」

の已然形に接続助詞「ば」が付いて確定条件を示す。その名を持つているので、の意。 ○やへ山ぶき 三六一三番「語釈」参照。 ○うかりける 「うかり」は「うし」のかり活用連用形。「うし」はつらく、やりきれないの意。「ける」は「けり」の連体形で「ぞ」の結び。 ○へだてて 「へだて」は「へだつ」の連用形で、疎み遠ざける、うとんじる、男女の間を妨げる意。ここでは、女性の側が男性を遠ざけていることをいう。「やへ（やまぶき）」の縁語。「て」は接続助詞。状態を表し、下に続く状態を修飾する。……の状態で。 ○をれる 「る」は存続の助動詞「り」の連体形。花を「折る」という表現は、男性が女性を強引に妻にすることを比喩的に表す。

【通釈】

その名を持つているので、八重山吹とはつらいものだったのだ。幾重にも隔てのある状態で、手折って妻にしたあなたの冷淡さに（それを思い知ったよ）。

【他出】

『古今和歌六帖』第五、二七六三番

ものへだてたる

なにしおへばやへ山ぶきぞうかりけるへだててをれる君によそへて
『河海抄』（源氏物語古注釈書引用和歌）胡蝶、一四三五番

名にしおへば八重款冬ぞうかりけるへだててをれる君によそへて

【考察】

初句「なにしおへば」の勅撰集における初出は、『後撰集』である。「名にしおへばしひてたのまん女郎花はなの心の秋はうくとも」（後撰集・

秋中・三四三・つらゆき・題しらず)、および「名にしおへばなが月ごと
に君がためかきねの菊はにほへとぞ思ふ」(後撰集・秋下・三九八・
よみ人も・題しらず)が挙げられる。八代集においてこの歌句を有する
ものはこの二首のみである。私家集には、「名にしおへば猶なつかしき
女郎花をられにけりな我がなたてに」(小町集・六・女郎花いとおほく
ほりて見るに)をはじめ、『好忠集』『源順集』『能宣集』『朝光集』など
の平安中期の私家集に集中して用例が見られる。

第二句の「山ぶき」は、当該歌において、女性に見立てられ、それを
「をる」と表現することにより、男が女を我がものとすることを比喩的
に示している。類例は、「妹に似る草と見しよりわが標めし野辺の山吹
誰か手折りし」(万葉集・卷十九・四二二・四一九七・京の人に贈る歌
二首)が早く、八代集では「宮こ人きてもをらなんかはづなくあがたの
るどの山吹の花」(後撰集・春下・一〇四・橘のきんひらが女・あがた
のゐどといふ家より、藤原治方につかはしける)や、「とへとしもおも
はぬやへのやまぶきをゆるすといはばをりにこむとや」(後拾遺集・雑二・
九六三・和泉式部・ひさしうおとせぬ人のやまぶきにさして日ごろのつ
みはゆるせといひてはべりければ)がある。なお、前掲の『小町集』歌
も、「女」という名をもつ「女郎花」を「をる」と表現する、同様の比
喩である。

第四句に見える動詞「へだつ」は、当該歌において、「八重(山ぶき)」
との縁で用いられていると見られるが、「八重」と「へだつ」との組み
合わせは、「しらくものやへにかさなるをちにもおもはむ人に心へだ
つな」(古今集・離別・三八〇・つらゆき・みちのくにへまかりける人
によみてつかはしける)といった歌に見出せる。

また、『源氏物語』胡蝶巻には、「こてふにもさそはれなまし心ありて
八重山吹をへだてざりせば」(源氏物語・胡蝶・三六五・秋好中宮)と
いう歌があり、当該歌と同様に「八重山吹」が詠み込まれている。この
秋好中宮の歌について、『河海抄』は、『古今六帖』二七六三番歌を指摘
する(「他出」参照)。当該歌と結句を異にするのみのこの歌は、第五帖
の「ものへだてたる」という題に配されている。秋好中宮の歌は、六条
院の南の池の小さな築山を「隔ての関」に見立てたことを踏まえた作で
ある。『河海抄』が、当該歌ではなく、二七六三番歌に着目したのは、
この点を重視した上で、『古今六帖』の歌題を手がかりに歌を選択した
ためであろうと推察される。

三六一六(山ぶき)

【本文】

やまぶきのそれにあくことなくしあらば人のしるべく我こひめやは

【校異】 ○それに―それに「色、」左傍書(紀) ○あくこと―あくこ
とイ (和・宮) ○人のしるへく―人しるへく□(紀) 人のしるへく(黒)

○こひめやは―恋めやも(紀)

【語釈】 ○それ 初句の山吹を指す。「……のそれ」で、対象物を捉え直
す表現。「松の葉にかかれる雪のそれをこそ冬の花とはいふべかりけれ」
(後撰集・冬・四九二・よみ人しらず・題しらず)。 ○あく 飽きがく
る。満足する。 ○なくしあらば ないならば。「し」は副助詞。「あら
ば」は「あり」の未然形に接続助詞「ば」が付いた順接仮定条件。 ○
こひめやは 恋い慕うだろうか、いや、そんなことはしない。「め」は
意志を表す助動詞「む」の已然形。「やは」は反語。

【通釈】

山吹の、まさにその山吹の美しさに満足することがないのならば、人が知るように（はつきりと）、私は恋い慕うだろうか。いや、そんなことはしない。（私は飽きてしまおうから、いま熱烈に慕ってしまおうのだ。）

【他出】なし

【考察】

「春雨にほへる色もあかなくにかさへなつかし山吹の花」（古今集・春下・二二二・よみ人しらず・題しらず）に代表されるように、「やまぶき」の色は美しく、見飽きることがないものである。それを当該歌は、「あくことなくしあらば」と仮定し、結句に反語を用いることで、飽きる時がくるからこそ現在の熱烈な思いがあると詠む。

第二句の「あくこと」は、後に否定の意をもつ語をとまなう表現である。用例は、『新編国歌大観』を検しても十一例と少なく、『万葉集』に一首あるほかは全て平安期の歌ばかりである。「我がごとや人もみるらんさくらばなくことしらぬ色にも有るかな」（書陵部藏御所本（五一〇・一二）躬恒集・五四）、「香をだにもあくことかたき梅の花いかにせよとか色のそふらん」（新拾遺集・春上・五八・花山院御製）などの用例がある。

第四句の「人のしるべく」は、『新編国歌大観』でのべ四十四例を数えるが、そのうち八例は『万葉集』に載る。「はなはだも降らぬ雨ゆゑにはたづみいたくな行きそ人の知るべく」（万葉集・巻七・一三七四・二三七〇・雨に寄する）のように、結句に用いる例も多いが、当該歌のように、第四句に用いる例も、「おもひつつねにはなくともい

ちじるく人のしるべくなげきすなきみ」（人丸集・一〇）のほか、散見する。なお、平安期成立の私家集の例は、この『人丸集』のみである。

結句の「こひめやは」は、紀州文庫本のみ「こひめやも」の異同が存する。『新編国歌大観』によれば、後者の用例は、のべ七十四例にのぼる。しかも、『万葉集』に十七例が集中していることから、万葉色の強い表現であるといえよう。「若鮎釣る松浦の川の川波の並にし思はばわれ恋ひめやも」（万葉集・巻五・八六二・八五八・娘等の更に報ふる歌三首）など、当該歌と同様に結句に置かれることが多い。一方、「こひめやは」は、二十一例と用例は少ないものの、「三吉野のおほかはのべの藤波のなみにおもはばわがこひめやは」（古今集・恋四・六九九・よみ人しらず）という用例があり、当該歌と結句全体が一致している。

ちなみに、下句の酷似する歌には、「山しなのおとはの山のおとにだに人のしるべくわがこひめかも」（古今集・恋三・六六四・読人しらず・題しらず・この歌、ある人、あふみのうねめのとまむ申す）、「山しなのおとはのたきのおとにのみ人のしるべくわがこひめやも」（古今集・墨滅歌・一一〇九・うねめのたてまつれる・返し）という『古今集』の歌が二首存在する。結句末尾の若干の異同はあるが、下句におけるひとつの表現の型であったと考えうる。

三六三一（なでしこ）

【本文】

すずしやとくさむらごことに立ちよればあつさぞまさるとこ夏の花

【校異】 ○すずしやとー涼しさに（和・宮）

【語釈】 ○すずしやと 「や」は疑問。涼しいかと思つての意。 ○とこ

なつ 撫子の異名。常に夏であるように花期が長いことに由来する。八、九月頃に咲く。秋の七草の一。

【通釈】

涼しいかと思つて、草むらがあるたびに立ち寄ると、どこにでも、暑さが増す「常夏」の名をもつ撫子の花があるよ。

【他出】

『和漢朗詠集』 卷上、夏、一六五番

(納涼)

すずしやとくさむらごとにはちよればあつさぞまさとこなつのは
な

【考察】

初句の「すずし」という形容詞は、「河風のすずしくもあるかうちよする浪とともにや秋は立つらむ」(古今集・秋上・一七〇・つらゆき・秋たつ日、うへのをのこどもかものはらにかはせうえうしけるとともにまかりてよめる)のように、気候が暑苦しくなく清々しい様子を表す。「すずしやと」という歌句は、「をし鳥のふすまのなかもすずしやとよなよな霜の夕かさねつつ」(海人手古良集・三六・冬)という用例があるが、平安期の例としては、他に管見に入らない。一方、和学講談所印本・宮崎文庫本は初句を「涼しさに」としている。「あさばらけけさもあらしのすずしさにあふぎのかぜもわすられにけり」(大式高遠集・一一〇・陸奥守さねかたがこの大とこの、けさあふぎこひたりしを、まだやらざりしもよほしにおこせたりしかへりごと)という歌が、平安中期の例として挙げられるが、平安時代全体を見渡しても、用例数はきわめて少ない。

第二句の「くさむら」という語は、虫とともに詠まれることが多い。特に「くさむらごと」に」という句は、勅撰集にも、「秋の夜はつゆこそことにさむからし草むらごと」にむしのわぶれば」(古今集・秋上・一九九・よみ人しらず・題しらず)、「をみなへし草むらごと」にむれたつは誰松虫の声に迷ふぞ」(後撰集・秋中・三三九・よみ人も・題しらず)、「ちとせとぞ草むらごと」にきこゆなるこや松虫のこゑにはあるらん」(拾遺集・賀・二九五・平兼盛・廉義公家にて人人にうたよませ侍りけるに、くさむらのなかのよるのむしといふ題を)ほかの用例がある。『拾遺集』の兼盛歌は、貞元二(九七七)年中秋に藤原頼忠邸で行われた、三条左大臣殿前裁歌合の歌であるが、この歌会で、計六首の歌にこの句が用いられている(『新編国歌大観』第五卷、尊経閣文庫十卷本歌合巻八所収の本文に拠る)ことは、注目に値しよう。

また、私家集においては、「たなばたのやどりなるべしはたおりめくさむらごと」になくこゑのする」(源順集・九七・双六番のうた、これもありただがよみはじめたるに、よみつぐ)、「あきの野の草むらごとにおく露はよるなくむしのなみだなるべし」(好忠集・二〇五・七月中)、「むしのねぞ草むらごと」にすだくなる我もこのよはなかなぬばかりぞ」(好忠集・二一八・八月上)など、十世紀後半の用例が目立つ。

第三句の「立ちよれば」の先例は、「立ちよれば袖にそよめく風の音に近くはきけどあひもみぬかな」(貫之集・六八四)、「おもひわび君がつらきにたちよればあめも人目ももらさざらん」(九条右大臣集・七八・右近につかはしける)があり、男性が女性を訪ねる場合によく使われている。

結句の「とこ夏」は、「ちりをだにすゑじとぞ思ふさきしよりいもと

わがぬるとこ夏のはな」(古今集・夏・一六七・みつね・となりよりとこなつの花をこひにおせたりければ、をしてみてこのうたをよみてつかはしける)が、勅撰集における初出で、『後撰集』に五首、『拾遺集』に三首詠まれる。「床」と同音であることから、しばしば恋歌に用いられる。また、暑さを連想した、「とこなつにおきふす露はなになれやあつれてせこがまどほなるらん」(和泉式部集・二九・夏)という歌もある。当該歌は、涼を求めて草むらがあるたびに立ち寄ってみたが、どこにも、暑さを連想させる名の「常夏」があったという、言葉遊びの歌であるが、「立ちよれば」や「とこ夏」からは、恋歌のイメージをも連想させる。

三六三四(秋はぎ)

【本文】

そせい

白妙のなみかもたつとみるまでにみだれてさけるやまのはぎかな

【校異】○白妙の—白浪の(松・江) ○やまのはぎかな—山のはぎかなふきの花(永)やまとなてしこ(和)やまなてしこ(宮)山のはな□な(寛)

【語釈】○白妙の 白栲は栲なで作った製品であることから、白栲のように真白な、の意で、白いものを表わす語にかかる枕詞。ここでは「なみ」にかかる。 ○なみかもたつ 「かも」は係助詞の「か」と「も」が重なったもの。この場合の「か」は疑問の意を表す。なみがたっているのだからか。 ○までに 副助詞「まで」に格助詞「に」の付いたもので、事態の及ぶ程度を示す。ほどに。 ○はぎ 秋の七草の一。紅紫色ないし白色の蝶形花をつける。ここでは白色の萩。

【通釈】

白波がたっているのだろうか、と思うほどに、咲き乱れている、山に咲く萩の花であるよ。

【他出】なし

【考察】

白い波を詠んだ歌は、八代集では三代集と『新古今集』に比較的多く見られ、三代集では『後撰集』の十七例が最多である。『古今集』には当該歌のように、白い波と花を比喻によって重ね合わせた、「秋風の吹きあげにたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか」(古今集・秋下・二七二・すがはらの朝臣・おなじ御時せられけるきくあはせに、すはまをつくりて菊の花うゑたりけるにくはへたりけるうた、ふきあげのはまのかたにきくうゑたりけるによめる)という歌が存在する。だが、白い波を詠んだ歌の中でも、「白妙のなみ」という表現はごく少数であり、八代集では「わたつ海のかざしにさせる白妙の浪もてゆへる淡路しま山」(古今集・雑上・九一一・よみ人しらず)、「うの花のさきぬる時は白妙のなみもてゆへるかきねとぞみる」(新古今集・夏・一八一・大宰大弐重家・題しらず)の二例のみ見出せる。なお、前者は、『古今六帖』にも収められている(一九一四番)。

「……とみるまでに」という表現は、「妹が家に雪かも降ると見るまでにここだもまがふ梅の花かも」(万葉集・卷五・八四八・八四四)をはじめ、『万葉集』に六例あるが、八代集では、「あさぼらけありあけの月と見るまでによしののさとにふれるしらゆき」(古今集・冬・三三二・坂上これのり・やまとのくににまかれりける時に、ゆきのふりけるを見てよめる)、「時わかずふれる雪かと見るまでにかきねもたわにさける卯花」(後

撰集・夏・一五三・卯花のかきねある家にて)の二例のみである。私家集では、「あさみどりそめかけたりとみるまでにはるのやなぎはもえにけるかな」(赤人集・一四六)、「むらたづのやどれるえだと見るまでにまつのみどりもうづむしらゆき」(恵慶集・一一三・十二月、ある所の歌合せさせ給ひしに、松、にはのむめ、冬月、池のこほり 松の雪)、「やまひめのそめてはさほすころもかと見るまでにほふいはつつじかな」(好忠集・七九・三月中)などに見られ、十世紀後半までに見られる表現であることがわかる。「みるまでに」の比喩表現の対象となるものは、「雪」、「梅」、「卯の花」など、白い色彩の景物が大半で、「いはつつじ」の赤を詠む『好忠集』は、例外的である。

当該歌の萩は、白い波に見立てていることから、白色であろう。白い萩を詠んだ歌は、「わけわぶる露は袂にしたひきて色こそみえねまものしらはぎ」(正治後度百首・七二六・季保)が見出せるが、『新編国歌大観』では、平安期の例は見られない。ただし、『万葉集』には、「我が待ちし白芽子(あきはぎ) 咲きぬ今だにもほひに行かな彼方人に」(万葉集・卷十二・一八・二〇一四)という例があり、『新編国歌大観』では、『万葉集』中唯一例である「白芽子」の表記を、「あきはぎ」と読んでいるけれども、『校本万葉集』を繙くと、元暦校本・類聚古集において、「しらはぎ」の訓が見える。これらの写本は、平安期の書写であり、白い萩を歌材とする当該歌が、この訓の影響歌に詠まれた可能性は、否定できないであろう。なお、『古来風体抄』では、先の『万葉集』歌の第二句を、「しらはぎ咲きぬ」(古来風体抄・一〇五)とする。

「はぎ」を詠み込んだ歌は、「我が岡にさを鹿来鳴く初萩の花妻どひに 来鳴くさを鹿」(万葉集・卷八・一五四五・一五四一・大宰帥大伴卿歌二

首)、「さを鹿の萩に貫き置ける露の白玉あふさわに誰れの人かも手に巻かむちふ」(万葉集・卷八・一五五一・一五四七・藤原朝臣八束の歌一首)など、「鹿」「露」とともに詠まれることが圧倒的に多い。

結句について、『新編国歌大観』では、「やまのはぎ」(あるいは「やまはぎ」という語は、他に例を見ない。当該歌においては、「やま」と場所を明示することにより、白波の立つ水辺の情景に見立てた上句との対比が鮮明になっている。

なお、『古今六帖』(桂宮本)において、作者を素性と記す歌は四十四首ある。このうち、現存『素性集』に同一の歌があるものは、十九首存する。また、『素性集』以外の歌集を出典と想定しうる歌が十二首ある。ただし、『古今集』の配列を考慮して素性歌と判断した可能性のある『古今六帖』四一六番歌を除く十一首については、素性歌と判断する根拠は、今のところ見出せない。これらの歌は、第一帖に三首、第二帖に二首、第三帖に一首、第四帖に一首見えるが、第五帖にはなく、第六帖に四首分布している。さらに、作者名を素性と明記しながら、出典が見出せない歌は、残りの十三首であるが、第五帖には一首も見出せず、第一・三帖に一首ずつ見え、第二帖に四首あるが、第六帖では七首にのぼる。

三六三六

【本文】

やかもち

わがやどのはぎの花咲く夕日影いだしていもをみるよしもがな

【校異】 ○夕日影いたしていもをみるよしもかなー夕かけに今も見てしか妹かすかたを(黒) 夕陰に今もみてしか妹かすかたを(寛)

【語釈】○やど 三六一三番「語釈」参照。○夕日影 夕日の光。夕方の日影。○いだして 意味がとりにくい。ここでは「出す」としたが、あるいは、「いたす」で、努力する、力を尽くす意か。○いも 親しみを込めて女性（妻、恋人、姉妹など）を呼ぶ万葉語。○みるよしもがな「よし」は、手段・方法の意。見る方法があればいいのになあ。

【通釈】

私の家の庭先にある萩の花が咲いている夕方の日の光。その中に、好きなあの人を出して、見る方法があればいいのになあ。

【他出】なし

【考察】

当該歌には、諸本間で大きな本文の異同がある。すなわち、「校異」に記しているように、黒川本と寛永九年版本の本文において、第三句以下に異文があり、それが、出典と思しき『万葉集』の本文、「わがやどの萩咲く夕影に今も見てしか妹が姿を」（万葉集・巻八・一六二六・一六二二・大伴田村大嬢、妹坂上大嬢に与ふる歌二首）と全く一致するのである。『万葉集』によれば、作者は大伴田村大嬢であるが、『古今六帖』では諸本共通して家持とする。

「わがやど」と「いも」との組み合わせは、『万葉集』に長歌を除いて四例見られる。「我がやどの草の上白く置く露の身も惜しからず妹に逢はざれば」（万葉集・巻四・七八八・七八五・大伴宿禰家持・娘子に贈る歌三首）、「我がやどの時じき藤のめづらしく今も見てしか妹が笑まひを」（万葉集・巻八・一六三一・一六二七・大伴宿禰家持、時じき藤の花と萩の黄葉でると二つの物を攀ちて、坂上大嬢に贈る歌二首）など、家持およびその周辺で詠まれた作が多い。

第四句「いだして」は、意味が通じにくい。「いたす」ならば、『伊勢物語』『源氏物語』などに平安中期の例があるが、和歌における用例は見当たらない。本稿では、「妹が姿」を「夕影」の中で見たいという、出典の万葉歌の意を踏まえ、「いも」を「夕日影」の中に「出して」見たいと解釈した。

「いも」と「はぎ」が同時に詠まれる歌は、『万葉集』に、「妹が目を始見の先の秋萩はこの月ごろは散りこすなゆめ」（万葉集・巻八・一五六四・一五六〇・大伴坂上郎女、跡見の田庄にして作る歌二首）、「秋さらば妹に見せむと植ゑし萩露霜負ひて散りにけるかも」（万葉集・巻十・二一三一・二一二七）などが存する。「いささめに今も見が欲し秋萩のしなひにあるらむ妹が姿を」（万葉集・巻十二・二八八・二二八四）は、しなやかな萩の様子に恋人の姿を重ねた歌である。

第三句の「夕日影」は、黒川本・寛永九年版本には、本文異同のため存しない語である。『新編国歌大観』によれば、当該歌がこの語の初出であり、その後は、「夕日かけ秋とおぼゆるみやまべのこずゑさびしきひぐらしのこゑ」（新撰六帖・二二五一・日ぐらし）や、「さととほき田中のもりのゆふひかけうつりもあへずとるさなへかな」（続撰集・夏・一九三・参議雅経・建保三年五首歌合に、夕早苗）など、中世における用例ばかりである。一方、黒川本や寛文九年版本にある「夕陰」は、前掲の『万葉集』に見られるほか、勅撰集には「我のみやあはれとおもはむきりぎりすなくゆふかげのやまとなでしこ」（古今集・秋上・二四四・素性法師）などがある。とすると、当該歌における「夕日影」という語が、中世以降、『古今六帖』本文に混入した可能性は否定できない。なお、「夕日影」と対になる「朝日影」という語句は、早くも『万

『葉集』に、「朝日影にほへる山に照る月の飽かざる君を山越しに置きて」(万葉集・卷四・四九八・四九五・田部忌寸櫛子、大宰に任ずる時の歌四首)があり、『古今六帖』にも収載されている。「夕日影」という語は、この「朝日影」からの類推によって生じたとも考えるであろう。

結句の「みるよしもがな」の勅撰集における初出は、『古今集』である。「山河のおとにのみきくももしきを身をはやながら見るよしもがな」(古今集・雑下・一〇〇〇・伊勢・歌めしける時にたてまつるとてよみて、おくにかきつけてたてまつりける)、「おもふてふ人の心のくまごことにたちかくれつつ見るよしもがな」(古今集・雑体・一〇三八・よみ人しらず・題しらず)が収められている。

なお、『古今六帖』(桂宮本)において、作者を家持と記す歌は、三十九首ある(異文注記などを含む)。このうち、現存『家持集』にある歌は一首もなく、『万葉集』を出典と想定しうる歌が三十六首ある。残り三首のうち、第二帖一三四〇番は、『古今集』一〇七九番歌であるが、家持歌とする理由は不明である。当該歌は、今のところ出典未詳と言わざるをえない残り二首のうちの一首である(もう一首は、第二帖一二〇〇番)。

三六五三(秋はぎ)

【本文】

た(こ)だみね

秋はぎのした葉かくれてなくしかの涙やなにの色をそむらん

【校異】 ○した葉 した葉(黒・寛) ○かくれて―かくれの(永)

【語釈】 ○した葉 枝または幹の下の方にある葉。 ○涙や「や」は疑

問の係助詞。 ○なに 不定称の指示代名詞。名前や実体のわからない物事をさす。なにもの。なにごと。

【通釈】

秋萩の下葉に隠れて鳴いている鹿の涙は、いったい何の色を染めるのだろうか。

【他出】

『秋風和歌集』 卷第五秋歌上、二五七番

忠峰

秋はぎのしたにかくれて鳴くしかのなみだや花の色をそむらん
『雲葉和歌集』 卷第五秋歌上、四一六番

題不知

壬生忠峰

秋はぎのしたにかくれてなくしかのなみだやはなのいろをそむらん
『続千載和歌集』 卷第四秋歌上、三九四番

(題しらず)

壬生忠峰

秋はぎの下にかくれてなく鹿の涙や花の色をそむらん

【考察】

「下葉」とともに詠まれることの多い植物は、圧倒的に「萩」である。万葉期から用例が見え、『古今集』仮名序にも、「あるは松山の浪をかけ野なかの水をくみ秋はぎのしたばをながめあかつきのしぎのはねがきをかぞへ」とある。「あきはぎのしたば色づく今よりやひとりある人のいねがてにする」(古今集・秋上・二二〇・よみ人しらず・題しらず)のほか、用例は数多い。

「しか」の「涙」を唱歌の素材として採り上げた最初期の歌人は、紀貫之であろう。「秋萩にみだるる玉はなく鹿の声よりおつる涙なりけり」

〔貫之集・三五四〕などの歌が見出せる。勅撰集における初出は、「さをしかのなくねは野辺にきこゆれどなみだはこの物にざりける」（金葉集〔三奏本〕・秋・二二五・源俊賴朝臣 野亭聞鹿といへることをよめる）である。

また、「しかの涙」の例は、先述の貫之が、「妻恋ふる鹿の涙や秋萩の下葉もみづる露となるらん」（貫之集・四一七・萩）という歌を詠んでいるほか、「人こふるしかのなみだもかからじをいまさへかかるとはぎのうへの露」（元真集・一四三・ひとのいへに萩うゑたる見て）、「ながつきはぎのかれはにおくつゆのはなをしのぶるしかのなみだか」（好忠集・二六一・九月中）、「つまこふるしかのなみだやあきはぎのしたばのつゆにおきそはるらん」（能宣集・四五・たびまかるに、しかのなくをきはべりて）といった例が見られる。いずれも「萩」とともに詠まれるが、とくに貫之歌は、「鹿」「涙」「萩」「下葉」の四つの語を同時に詠み込んでいる点が、当該歌と共通しており、非常に類似性が高い。

〔他出〕において、第二句「した葉」は、いずれも「したに」である。この異文は、『古今六帖』諸本においては、黒川本と寛文九年版本の異文注記と一致する。また、第四句「なにの」は「花の」という対立本文をもつ。『古今六帖』諸本では、鹿の涙が「なに」を染めるのか、その対象は漠然としているが、〔他出〕では、萩の「花」の存在を明示する表現になっている。

なお、『古今六帖』（桂宮本）において、作者を忠岑と記す歌は三十八首ある（異文注記などを含む）。このうち、『忠岑集』（書陵部蔵五〇一・一二三、あるいは、西本願寺蔵三十六人集）に載る歌は、

二十七首を数える。残り十一首は、今のところ作者を忠岑とする根拠が見出せない。第一帖に三首、第二帖に一首、第三・四帖に各二首、第五帖にはなく、第六帖に三首存する。このうち、『古今集』『後撰集』にそれぞれ二首、出典を求めることができるが、いずれの歌も、作者は忠岑ではない。その他、『貫之集』歌二首、『素性集』『伊勢集』『新撰和歌』に各一首見える。現時点で出典未詳であるのは、当該歌のほか、作者名を「つらゆき ただみね 或本」と記す、第一帖五八八番歌の一首のみである。

三六五五（秋はぎ）

【本文】

つらゆき

あきはぎの下葉よりしもみづるはもとより物ぞ思ふべらなる

【校異】 ○もみつる―栂つる（松） 紅葉つる（和・林）もみちつる（江・

宮）紅葉る（黒）紅葉する（寛） ○へらなる―へら也（寛）

【語釈】 ○もみづる 夕行上二段活用動詞「もみづ」の連体形。草木の葉が紅葉する、色づくの意。 ○もとより 「萩の」根元もことから」の意に、「以前から」の意を掛ける。 ○物ぞ思ふべらなる 「物」を「思ふ」で、物思いにふける、思い悩むの意。「べらなる」は、助動詞「べらなり」の連体形で、係助詞「ぞ」の結び。……しているようだ。平安中期以降は古語化していったという（『日本国語大辞典』第二版）。

【通釈】

秋萩が、よりにもよって、下の方の葉から色付いているのは、以前から物思いにふけているのが、根元の方から表れているようだ。

【他出】なし

【考察】

第三句の「もみづる」について、諸本間で異同が存する。すなわち、「もみつる」(桂・永・紀)、「もみちつる」(江・宮)、「もみちする」(寛)の三種類の本文である。

「栴つる」「紅葉つる」と表記する三本(松・林・和)は、「もみつる」「もみちつる」のいずれであるのか、にわかに決しがたい。だが、このうち、和学講談所印本は、和歌本文を上句と下句とに分けた二行書きであり、当該歌の場合、上句の行末が「紅葉つる」になっている。第三句を字足らずにしないためには、「もみつる」ではなく、「もみちつる」と読むべきであろう。

第三句の本文を「もみちつる」とした場合、これに続く助詞「は」は、次の句の一音目に置かれ、第四句は「はもとより物ぞ」ということになる。和歌二行書きである神宮文庫蔵「宮崎文庫」印本においても、同様の句の切り方が見られる。この本文によると、「はもと」という語が生じることになる。「葉の元」の意を連想させるが、『新編国歌大観』には他例がなく、また、『日本国語大辞典』(第二版)においても立項されていない。さらに、第四句が、句中に単独母音音節を含まない字余り句となり、平安中期の例としては、きわめて破格ということになる。「もみちつる」という句自体も、『新編国歌大観』に用例を見出せない。そうすると、「もみちつる」という本文が、「もみつる」を「栴つる」「紅葉つる」と表記したことによる誤読から生じた可能性は、じゅうぶんに想定しうるであろう。

「物ぞ思ふ」という表現には、「夕ぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつ

そらなる人をこふとて」(古今集・恋一・四八四・読人しらす・題しらす)といった恋歌が見える。『百人一首』にも採られた「しのぶれど色にいでにけりわが恋は物や思ふと人のとふまで」(拾遺集・恋一・六二二・平兼盛・天曆御時歌合)も、同様の例に挙げられよう。当該歌は、下葉が色づいた萩に、物思いがとうとう顔色に出してしまった様子を重ねており、忍ぶ恋のイメージがある。

なお、『古今六帖』(桂宮本)において、作者を「貫之」と記す箇所は、三〇〇箇所、四三三首(異文注記や「おなじ」と記して貫之を指す場合を含む)にのぼる。このうち、作者名を貫之と明記しながら、今のところ出典未詳と言わざるをえない歌が三十五首(複数の歌を指して貫之作とする歌群を含めれば四十六首)あるが、ほぼ半数の十八首が、第六帖に集中して見出される(貫之歌群を考慮すれば、十一首追加され、第六帖にほぼ半数の五首存する)。

三六五六(秋はぎ)

【本文】

そせい

あきはぎの^(は)にはへるえだにめでたらばいとうつせみに人やおもはん
【校異】○にはへる―にはへる(松) 句へる(紀・黒・寛)

【語釈】○にはへる 動詞「にはふ」の連用形に存続の助動詞「り」の連体形が付いたものと見た。薄赤く色づく意。枝先に紅紫色の花を多数咲かせた様をいう。底本「にはへる」では意が通じないため、他本により校訂した。○めでたらば 「めづ」は、賞美する、愛する、心ひかれて捨てがたく思う、の意。○うつせみ 蝉、あるいは蝉の抜け殻の

意で、はかないイメージをもつ。

【通釈】

秋萩が薄赤く色づいている枝に心ひかれ賞美したならば、空蟬のようになりたいそうはかないことだと、人は思うだろうか。

【他出】なし

【考察】

「はぎ」と「にほふ」との組み合わせは、つとに『万葉集』から見られる。「草枕旅行く人も行き触ればにほひぬべくも咲ける萩かも」（万葉集・巻八・二五三六・一五三二・笠朝臣金村の伊香山にして作る歌二首）、「秋田刈るかりほの宿りにほふまで咲ける秋萩見れど飽かぬかも」（万葉集・巻十・二二〇四・二二〇〇・花を詠む）、「ことさらに衣は摺らじをみなへし佐紀野の萩ににほひてをらむ」（万葉集・巻十・二二一一・二二一〇七・花を詠む）のほか、用例は多い。平安期になると、「さをしかやいかがいひけん秋萩のにほふ時しもつまをこふらん」（貫之集・一五五・はぎのはな）といった歌があるが、用例は比較的少ない。

「（あき）はぎ」と「（うつ）せみ」とが同時に詠み込まれた歌は、『新編国歌大観』を検しても、他例を見ない。萩の花の盛りの短さを、「いとうつせみに」という独自の表現で示したと見た。

結句「人やおもはん」の例は、「わがやどにむめのにほひのみちぬればをりてつめると人やおもはむ」（忠見集・七四・むめ）、「ひとしれぬこひにししなばおほかたのよのはかなきとひとやおもはん」（後拾遺集・恋四・七八〇・源道濟・題不知）などが存する程度で、平安中期以前の歌は少ないが、前者の忠見歌は、結句が一致するほか、花の香を唱歌の素材とし、動詞「にほふ」を用いている点においても、当該歌と類似し

ている。

なお、作者素性に関しては、三六三四番「考察」を参照されたい。

附記

本稿は、歌語研究会（同志社大学文化情報学部学生研究会）の活動の成果であり、科学研究費補助金基盤研究（C）「文字列データ解析システムの構築と平安中期歌語生成に関する研究」（課題番号19500217、平成十九〜二十一年度）における研究の一部である。土山（三六一五番）、藤井（三六五三番）、八巻（三六一六番）、木村（三六五五番）、久保（三六一三・三六三六番）、青木（三六〇五番）、小川（三六三二・三六五六番）、桐谷（三六三四番）が分担執筆し、土山が原稿を取りまとめた後、さらに福田が全体にわたる加筆修正をおこなった。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CDROM版 Ver.2とともに、竹田正幸氏（九州大学大学院システム情報科学研究所）作成の文字列解析器「eCSA」Ver.200を使用した。

最後に、資料をご提供くださった宮内庁書陵部・島原図書館嶋原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げます。

〈附録〉

『古今和歌六帖』別出歌一覽―第六帖(3) 山吹・撫子・秋萩―

凡例

- 1、『古今和歌六帖』本文と歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。作者名・詞書・左注がある場合は、当該歌のあとに()を付して記す。
- 2、調査対象として、『新編国歌大観』から以下の歌集を選択する。『古今和歌六帖』の成立を十世紀後半と想定されるが、出典としては、やや後世の作品まで調査範囲を設定している。

第一巻 1 古今和歌集 4 後拾遺和歌集

第二巻 1 万葉集 6 和漢朗詠集

第三巻 1 人丸集 81 赤染衛門集

第五巻 1 民部卿家歌合 61 源大納言家歌合 長久二年、253 紀師匠

曲水宴和歌 269 九品和歌、281 歌経標式(真本) 285 新撰髓

脳 290 新撰和歌髓脳、347 古事記 353 風土記、371 日本霊異記、

372 三宝絵、389 土左日記 393 和泉式部日記、414 竹取物語 420 落窪物語

第六巻 2 秋萩集 5 麗花集

第七巻 1 奈良帝御集 36 肥後集

- 3、別出歌は、『新編国歌大観』の巻数・通し番号を付した歌集名と歌番号で示す。

〈例〉 3-19 貫之 355

『新編国歌大観』第三巻19番目の『貫之集』 355 番歌

- 4、別出本文に異なる場合は、句ごとに「」を付して記す。なお、

漢字と仮名など、表記上の相違は指摘せず、有意の異同のみに限る。

- 5、『古今和歌六帖』所収歌には、別の歌集の歌との間で、さまざまに類似性を有するものがある。そのまま別出歌とは認めにくいもの、まったく無関係に作られたとも考えにくい場合には、〈参考〉と記し、波線を付す。

- 6、特定の別出歌が指摘できない場合や、十一世紀以降の作品にしか別出が見出せない場合は、いわゆる出典未詳歌として〈未詳〉と記し、傍線を付す。

別出歌一覽

山ぶき

3596 いまもかもさきにはふらん橘のこじまのさきのやまぶきのはな

1-1 古今121、3-3 家持305 「こじまがさきの」、3-4 猿丸34

「こじまがさきの」

3597 やまぶきはあやなくさきそ花みんとうゑてし君がかよひこなくに

1-1 古今123 「あやななさきそうゑけむ君がかよひこなくに」

3598 ちはやぶる神なびがはにかけみえていまやさくらん山ぶきの花

2-3 新撰和93 「かはづなく」、2-6 和漢朗142 「かはづなく」「いま

まやちるらん」、2-1 万葉1439 「かはづなく」「いまかさくらむ」、

3599 5-1 264 十種33 「かはづなくかみなみ山に」「いまかなくらむ」

をりてもみをらずてもみんよしのがはみなそこてりてさける山吹

2-3 新撰和97 「みなせ河みなそこかけて」

3600 うつるかげありとおもはずはみなそこにはるとぞみまし山ぶきの花

- 3601 (つらゆき)
 3-19 貫之 476 「ありとおもへば水底のものとぞ見まし」
 かはづなくゐでのやまぶきちりにけりはなのさかりにあはましもの
 を
- 3602
 1-1 古今 125、2-3 新撰和 99 「さきにけりあはましものを花の
 さかりに」
 八重ながらあだなるみれば山ぶきのしたにこそなけるのかはづは
 3-30 斎女御 63 「あだにみゆれば」「したにぞなげく」
- 3603
 ながれくるかはづなくなりあしひきのやまぶきのはなにほふべらな
 り (つらゆき)
- 3604
 3-19 貫之 77 「ながれ行く」
 ゆかりともきこえぬものを山ぶきのかはづがこゑにほひけるかな
 3-19 貫之 254
- 3605
 やまぶきのはなはちとせもさくべきをくれぬる春のをしくも有るか
 な
- 3606 (未詳)
 よしのがはきしの山ぶきふくかぜにそのかけさへうつろひにけり
 (つらゆき)
- 3607
 1-1 古今 124、2-3 新撰和 101
 春ふかみえださしひちてかみなびのかはべにさける山ぶきのはな
 (みつね)
- 3608
 7-5 躬恒 13 「春ふかく」「かはべにたてる」、3-12 躬恒 380 「か
 はべにたてる」
 あしひきのやまのやまぶき山ならばさくさかりにはあふ人もあらし
- 3609 (みつね)
 3-12 躬恒 370 「やまぶきの花やまながらさくらがりには」、7-
 5 躬恒 21 「山ぶきのはな山ながらみてさかりにはあふ人もなく」
 春ふかき色はなけれどやまぶきのはなに心をまづぞそめつる
- 3610
 5-10 亭子合 31 「いろこそなけれ」、7-5 躬恒 48 「色こそなけれ」、
 3-12 躬恒 400 「いろこそなけれ」「まづぞしめつる」
 ひとりのみみつぞしのぶ山ぶきの花のさかりにあふ人もなし
- 3611
 7-5 躬恒 46、3-12 躬恒 399 「みてこそこふれ」「あふこともなし」
 いかでわがあはんとおもひし山吹のはなのさかりにあひにけるかな
 7-5 躬恒 43 「はなのさかりの過ぎにけるかな」、3-12 躬恒 397
 「をらむとおもひし」「はなのさかりのすぎにけるかな」
- 3612
 もろともいでのさとこそこひしけれひとりをりうき山ぶきのはな
 5-416 大和 177
- 3613
 わがやどの八重山ぶきのちるをみて春過行くとみるぞかなしき
- 3614 (未詳)
 はるの雨にほへる色もあかなくにかさへなつかし山ぶきの花
 3-3 家持 60、1-1 古今 122 「春雨に」、2-3 新撰和 95 「はるさ
 めに」、3-4 猿丸 33 「はるさめに」
- 3615 (未詳)
 なにしおへばやへ山ぶきぞうかりけるへだててをれる君がつらさに
- 3616
 やまぶきのにこれにあくことなくしあらば人のしるべく我がこひめや
 は (未詳)

- 3617 わがやどのなでしこの花さきにけりたをりて人にみせんこもかも
なでしこ
(やかもち)
- 3618 わがやどのなでしこの花さきにけりたをりて人にみせんこもかも
2-1万葉 1500 「さかりなりたをりてひとめ」
わがやどのなでしこの花さきにけりたをりて人にみせんこもかも
(やかもち)
- 3619 わがやどのなでしこの花ちらめやはいやはつはなの咲きまさるとも
2-1万葉 4474 「わがせこがやどのなでしこちらめやもいやはつは
なにさきはますとも」
なでしこのその花にもかあしるあしるてにをり持ちてこふるひなけ
ん
(ママ)
- 3620 2-1万葉 411 「なでしこが」 「あさなさなてにとりもちてこひぬ
ひなけむ」
- 3621 とこなつのはなをしみればうちへてすぐす月日の数もしられず
(つらゆき)
- 3622 3-19貫之 273、1-3拾遺集 1079 「すぐる月日の」、2-3新撰和 157
「ときもしられず」
ながけくの色をそめつつ春秋をしらでのみ咲くとこ夏の花
(つらゆき)
- 3623 3-19貫之 480 「ながけくに」 「春も秋も」 「撫子のはな」
かはるときなきやどなれど花といへばとこなつをのみうゑてこそみ
め (つらゆき)
- 3624 3-19貫之 382 「なき宿なれば花といへど」 「植ゑてこそみれ」
我のみやあはれとおもふきりぎりす鳴く夕かげのやまとなでしこ
(そせい)
- 3625 1-1古今 244 「あはれとおもはむ」、5-4寛平后 80 「あはれと
おもはむ」、2-2新撰万 89 「われのみかあはれとおもふ」、3-
9素性 5 「あはれとおもはむ」
ちりをだにすゑじとぞ思ふうゑしよりのいと我がぬる床夏の花
- 3626 2-6和漢朗 299、7-5躬恒 273、1-1古今 167 「さきしより」
いもとわれとぬるとこなつの花なればなべて人にはみせんともせず
(みつね)
- 3627 3-12躬恒 433 「いもののみ」 「はなみれば」、7-5躬恒 82 「いも
とのみ」 「なべても人に」
いづこにもさきはすらめど我がやどのやまとなでしこたれにみせま
し (伊勢)
- 3628 1-3拾遺集 132、3-15伊勢集 120、6-5麗花集 41
こきかぎりことはつみいれてなでしこにうつれる袖の色ぞみせまし
(いせ)
- 3629 3-15伊勢集 349 「なでしこのうへなるそでの」
わが袖にうつらばうつれてもやめずつみやいれましなでしこの花
(むねゆき)
- 3630 3-15伊勢集 348 「てもやまず」
あなこひしいまもみてしか山がつかきほにさける山となでしこ
1-1古今 695、5-1和泉記 136、2-3新撰和 270 「かきほにおふる」
すずしやくとくさむらごに立ちよればあつさぞまさるとこ夏の花
- 3631

〈未詳〉

2-6 和漢朗 165

うつくしとみるたびごとになでしこの花の名残はめぐしや^(ママ)はあらぬ

3-3 家持 77 「はなのさかりはなつかしなきみ」

秋はぎ

秋はぎのはなさきにけり高砂のをのへのはかはいまや鳴くらん

(としゆき)

1-1 古今 218、3-8 敏行 16、2-2 新撰万 127 「をのへにいまやし

かのなくらむ」

白妙のなみかもたつとみるまでにみだれてさけるやまのはぎかな

(そせい)

〈未詳〉

秋はぎのしたばにつけてめにちかくよそなる人の心をぞしる

(女のつらきにやれる)

1-3 拾遺集 1116 「心をぞみる」、3-19 貫之 884 「心をぞみる」

わがやどのはぎの花咲く夕日影いたしていもをみるよしもがな

(やかもち)

〈参考〉 2-1 万葉 1626 「わがやどのあきのはぎさくゆふかげにい

まもみてしかいもがすがたを」

わがやどのひとむらはぎをおもふこにみせでほとほとちらしつるか

も (やかもち)

2-1 万葉 1569 「みせずほとほと」

たまにぬくけたたばらむ秋はぎのうへわくらかにおける白露

(ゆはらの大君)

2-1 万葉 1622 「たまにぬきけたずたばらむ」 「うれわくらばに」、

3-3 家持 223 「たまにぬきかけてまもらん」 「うれつとばに」、

3-3 家持 95 「たまにぬけきえずはきえず」 「うれもたわわに」

よをさむみころもかりがねなくなへにはぎのしたばも色づきにけり

(人丸)

2-3 新撰和 28、1-3 拾遺集 1119 「はぎのしたばは」、3-13 忠

岑 179 「はぎのしたばは」、3-13 忠岑 32 「つゆさむみ」、7-6 忠

岑 20 「風さむみ」 「はぎのしたばは」、1-1 古今 211 「うつろひに

けり」、2-2 新撰万 153 「うつろひにけり」

はぎのつゆたまにぬかんととればけぬみん人はなほよそながらみよ

(ならのみかど)

3-3 家持 221 「えだながら見よ」、1-1 古今 222 「よし見む人は

枝ながら見よ」、7-1 奈良帝 2 「よし見むひとはえだながら見よ」

花の色はあまたみゆれどひとしれぬはぎのしたばぞながめられける

(つらゆき五首)

3-19 貫之 121 「人しれず」

つまこふるしかのなみだや秋はぎのしたばもみづるつゆとなるらん

3-19 貫之 417

秋はぎをみつつけふこそくらしつれしたばはこひのつまにぞ有りけ

る

3-19 貫之 599

さをしかのいかがいひけん秋はぎのほふときしも人の恋しき

3-19 貫之 155 「さをしかや」「つまをこふらん」

3645 おく物はひさしきものを秋はぎのしたばの露のほどもなきかな

3-19 貫之 85

秋はぎのふる枝にさける花みればもとの心はかはらざりけり

(みつね)

3647 1-1 古今 219 「わすれざりけり」、7-5 躬恒 277 「わすれざりけり」

わぎもここにこひつつあらずは秋はぎのさきて散りぬる花ならましを

(ゆはらの大君)

2-1 万葉 120、3-4 猿丸 25 「わぎもこがこひてあらずはあきざり」

りの」 「はなをらましを」

3648 いもがめをみそめのやまの秋はぎはこの月比はおくらすなゆめ

(大とものさかの上女郎)

2-1 万葉 1564 「はつみのさぎの」 「ちりこすなゆめ」

3649 いくよへて後かわすれん散りぬべき野べの秋はぎみだるべきよを

(ふかやぶ)

1-2 後撰 317 「みがく月よを」、3-39 深養父 12 「みかく月よを」

3650 宮ぎのものとあらの小萩露をおもみ風をまつこと君をこそまて

1-1 古今 694

3651 しら露は上よりおくをいかなればはぎの下葉のまづもみづらん

(これひらの宰相)

1-3 拾遺集 513、1-3 拾遺抄 408、3-13 忠岑 124、7-5 躬恒 219

3652 さをしかのしがらみふする秋はぎはしたばやうへになり帰るらん

(みつね)

1-3 拾遺集 514、1-3 拾遺抄 409 「萩なれば」、3-13 忠岑 125 「は

ぎなれば」、7-5 躬恒 220 「はぎなれば」

3653 秋はぎのした葉かくれてなくしかの涙やなにの色をそむらん

(ただみね)

3654 〈未詳〉

秋はぎはまづさはよりもみづるを露の心のわけるとなみそ

(おき風)

7-6 忠岑 56 「うつろふをつゆのころは」、7-5 躬恒 221 「ま

づさすえよりうつろふを」 「わけるとぞみる」、1-3 拾遺抄 410 「う

つろふを露のわくとは思はざらん」、1-3 拾遺集 515 「まづさ

すえよりうつろふをつゆのわくとは思はざらなむ」、3-13 忠岑

126 「まづさすえよりいろづくをつゆのわくとはおもはざらん」

3655 あきはぎの下葉よりしもみづるはもとより物ぞ思ふべらなる

(つらゆき)

3656 〈未詳〉

あきはぎのにはへるえだにめでたらばいとつせみに人やおもはん

(そせい)

3657 〈未詳〉

うつろはんことだにをしき秋はぎにをれぬばかりもおける露かな

(伊勢)

2-6 和漢朗 284、3-15 伊勢集 96、5-267 三十六 38、5-268 深

窓秘 40、1-3 拾遺集 183 「秋萩を」、5-264 和十種 44 「をれぬば

かりに」、5-266 三十人 38 「あきはぎを」、2-3 新撰和 26 「お

ける白露」